三六六五番

妹を思ひ　眠の寝らえぬに　暁の　朝霧隠り
雁がねそ鳴く

三六六六番

夕されば　秋風寒し　我妹子が　解き洗ひ衣
行きてはや着む

三六六七番

我が旅は　久しくあらし　この我が着る　妹が衣
の　垢付く見れば